

聖書バイブル

と握り飯

— 日本戦話集



日本戦話集

バイブル

聖書と握り飯

棟田 博

バイブル
聖書と握り飯

一九六三年六月五日 印刷
一九六三年六月十日 発行

定価 三五〇円

著者 棟田 博

発行者 陶山 巖

印刷者 盛 英信

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三
振替東京 一五六五三

印刷所 慶昌堂印刷

聖書と握り飯・目次

聖書^{バイブル} 6

狼 21

落陽 36

握り飯 43

脱出 51

泉 58

馬 65

戦友 72

さいはて 79

蛭歌 87

消滅命令——94

鶏——110

嘘——117

写真——124

水筒——131

売春婦——139

准尉——146

雨將軍——153

サイパンから来た列車——177

装幀・カット

土井 榮

聖^バ書^イ
と握^ブり飯^ル

— 日本戦話集 —

聖書

「監守殿ッー」

日直監守の定位置は、中央廊下の中ほどであった。雑居房は、ずらりとその両側に並んでいた。

「監守殿ッー」

いつも風通しのいい中央廊下に、きょうは、そよりとも風がなかった。監守は、机の上に両足をあげ、椅子を後ろに反らせて、はだけた胸へ、扇子の風を送っていた。

「監守殿！ ジョウセイお願いします」

監守は、うとうとまどろみかけていたところだった。

不機嫌な声で、彼は呶鳴った。

「誰かァ？」

「ハイ。第五雑居房。第三百三号」

監守は、扇子をたたみ、パチリッと机の上を叩いた。

「西山だな。またジョウセイか、貴様。たった、今さっきじゃないか」

「けっー」

と、西山菊松は舌うちした。それから、房内用の低声になって、

「またかだとー ヘン。大きにお世話だ。なにも他人様の尻めどを借りるわけじゃねえぜ」

ぼやいてから大声になった。

「下痢をしているんで……。ジョウセイお願いします」

「尻ぐせの悪い奴だ。一べんにひり出しておけ。――よし、ジョウセイ、許可する」

西山は、袴下をおろしながら、房の片隅へ行った。

二名の同房者は、その西山に背を向ける位置に坐り直した。

「てめえの尻でよッ。てめえの糞を垂れるのまで、許可

の蜂の頭のと吐しやがる。嫌じゃありませんかてんだ」汚物桶に跨がる度に、いつも西山が吐き出すおきまりの科白であつた。

臭気が、房内に罩めた。

雑居房は、疊なら五疊は敷けそうな板の間であつた。糞尿桶一個。蚊帳一帳。各自に毛布一枚宛。備品は、それだけである。

隣房との境界は、コンクリート壁で、鉄扉が中央廊下に面してい、その反対側は鉄柵になつていた。

鉄柵越しに、広場が見え、広場の向うに、炊事場と作業場の建物の一部が望めた。

ラングーン北西郊の、インセンの町はずれの酸果樹の林に囲まれた、この灰色の高い塀と、古風な赤煉瓦建築は、英国がビルマを植民地にしていた時代に建てたもので、いかにも「牢獄」と呼ぶにふさわしい陰気ないかめしさが漂漾してゐた。

「ところで……」と、蹲んだままで西山が云つた。「糞を垂れることをジョウセイというのは、いつてえ、どういうわけだ。——木村、お前、知んないか？」

兵器遺棄によるかどで、「六ヶ月」の木村二等兵は、日頃から、三百台番号を附されているこの同房者に怖れを抱いていた。

三百台番号者は、再犯者である。

「ハイ。六年兵殿。——木村、存じません」

木村の声は、囁やくような低声であつた。

私語は、一切、禁止されていた。

一ツ 在監者ハ勅諭ノ精神ヲ奉戴シテ云々……に始まる「在監者心得」の中に、私語セント欲スル場合ハ、交話願イマスト監守ニ届ケ、ソノ許可ヲ得テ……と明記してある。

「存じませんか。ふん！ 大学出のくせにか。——そいじゃ、そつちのクレオソートの先生はどうだ？」

医薬品を現地人に横流しした不正行為による「一ヶ年」の軍医中尉は、二の腕に遊廓の娼妓の名前を刺青している、下司で野卑な古年兵からぞんざいな言葉をかけられることに、つねに侮辱を感じて



「知らん！」

木で鼻をくくる返事を聞くと、

「そうかよッ。けッー」

と、西山は、唇を歪めて舌うちした。

この第五雜居房では、軍医中尉が最古参であった。次が、木村二等兵で、西山菊松一等兵は「新入り」であった。が、再犯番号を背負って入房してきた彼は、その日から、それが当然のように「牢名主」を気取った。

小隊長を手榴弾で脅迫し、それを押しとめようとした准尉をぶッ殴った「上官暴行」で、八ヶ月を勤め上げて、ここから満期^{マンキョウ}していったのは、つい、五ヶ月前であった。逆戻りした今度の刑期は、「二ヶ年」である。「窃盗及び婦女暴行」という芳ばしくない罪名だった。彼は貨物廠荒しをやり、盗品の罐詰を餌にしてビルマ人の後家さんを釣ったのである。

マンダレーで行われた野戦軍法會議の法廷で、西山は「婦女暴行」に就いては、強姦でなく和姦である旨を極力申し立てた。事実、そうだったのであるが、軍裁で弁解の通るわけがなかった。

五ヶ月ぶりに、彼流にいえば「懐しきムシヨ」に護送されてくると、二重鉄扉に掲げられている門札が変わって

いた。

「ほけ部隊」と、記されてあった。彼が在監していた頃には、「ビルマ方面軍拘禁所」という名称だったのである。

首をかしげていると、顔馴染の憲兵が笑いながらいった。

「西山。貴様がまたおみえになるといいうのでな。さき頃、刑務所に昇格したのだ」

「ほけ」とは、ビルマ方面軍刑務所の略号なのであった。

在監者の作業は、大別して、所内と所外とに区分されていた。

三百台番号は、もっぱら所内作業であった。逃亡の虞れを顧慮しての処置である。木工、鍛工、修理工といった特技囚は、それぞれの作業場で働くが、西山のようなべつに、なんの特技も有たぬ三百台は、所内雑役であった。草揺りや、所内建造物の清掃その他という、西山の

言い方をもってすれば、「くそ面白くもねえ」作業である。

軍医は、医務室勤務であつた。第五雜居房で出役作業に出されるのは、木村二等兵だけであつた。貨物列車の積荷や荷降ろしに駅へやられたり、貨物廠の倉庫へやられたり、労働はきついが、しかし、ちよつぱりにしる娑婆の空気が吸えるのである。

外界と完全に遮断されている筈の所内に、娑婆のいろいろな出来事が流布されるのは、こういった出役作業者が「情報」を持込むからであつた。

医務室の待合室が、「娑婆情報」の恰好な交換場になつてゐた。軍医中尉は、彼らの私語に熱心に耳をそば立ててゐた。

北部ビルマ、怒江戦線では、騰越^{とうえつ}、拉孟^{らもう}、竜陵^{りゅうりやう}の線が破られ、わが「菊」「竜」の二ヶ兵団は満身創痍となつて、シャン方面へ撤退中であり、イラワジ河畔に進出した英・印軍は逐次兵力を増強中で、いつ、強行渡河が敢行されるかわからず、ベンガル湾沿いの西南部では、英艦隊の艦砲射撃が日ましに熾烈である……等々、ビルマ全

戦線の戦況は、「娑婆情報」によれば、とみに悪化しつつあるらしかった。

そういえば、さきごろ、広場の一隅に藁人形が二十幾つ設けられた。監守の号令によつて、全在監者は竹槍でこれに突撃し、刺突するのである。この訓練が朝夕間稽古^{きこ}として実施されたことは、事態の容易ならざることを裏付ける一つの材料と観てよかつた。

軍医は、次々と入手するそういった情報をしかし、西山にはてんで教えようとはしなかつた。

夜。二十時の「点呼」に続いて「故郷礼拝」。そのあと「就寝」の号令がかかり、「消燈」となると、軍医は暑いの毛布を頭からひつ冠ぶり、その中に木村の頭を呼び入れて、こそこそと新情報を伝えてやるのだった。

西山はそんな軍医を、例の「けっー」という独特の舌うちをしなが、鼻白んで見ているが、時には、招かれざる頭を、にゅうつと毛布に突込んだ。

すると、軍医は、いつもびたりと口を噤んだ。が、それには構わず、西山は彼一流の所感をしゃべつた。

「そんな私物情報なんぞ聞くよりも、早わかりなものは、

近ごろのモッソーめしだ。質量ともにガタ落ちときた。わが軍の不景氣さ加減の何よりの証拠さ。そうじゃねえか。それによッ。ケツ拭き紙の下給まで減る一方だ。嫌じゃありませんかだ」

その下司な饒舌を避けようとして、軍医が毛布から頭を外へ出そうとすると、西山が、ぱっとその頭へ毛布をひっ冠せた。

「おう、クレオソートの先生。ついでに云々とくが、お前さんのケツ拭き紙の使い方は、ちと贅沢だぜ。五寸角一枚で済ましな。さもないと、第六房の御連中みてえによ、木の葉っぱで拭くさまになるぜ。——わかったな、木村も」

軍医は、唇をピクピクさせたがものを云わなかった。木村が返答した。

「ハイ。六年兵殿。わかりました」

西山は、ぼいと毛布を放り出すと、ごろりと自分の寝場所に寝ころがった。

「ジョウセイ。ジョウセイか。ふん。いってえ、どんなわけだかなア」

ケツ拭き紙から連想したらしく、そんな独り言を呟いた。

戦況悪化と、モッソーめしと、用便紙とは、たしかに、正比例するもののようであった。

三名の監守が戦闘部隊へ現地応召していったのは、その後、間もなくであった。このことは、全在監者に、一種の衝激を与えた。

モッソーめしは、さらに量を低下した。用便紙の減少は、もっとひどかった。出役作業者が、採取して持ちこむ潤葉樹の葉っぱが、各房の汚物桶の傍らに積まれるころになって、以前から少し痔のけのある木村が「ジョウセイ」の度ごとに、額へ膏油をにじませ、時に、呻めきをあげることがあった。

「痔というやつは、そんなに痛えのか？」

西山が訊くと、木村は、半ばベソを掻く顔つきで、

「そりゃあ、もう。なにが痛いといったって……」

「大袈裟なこと吐しやがる。タカが尻^{おしり}じゃねえか」

「だから痛いのだ」

と、軍医中尉が、いつもの木で鼻をくくる云い方で、横から口を出した。

「ふん。そうかよウ」

西山は、唇を歪めたが、

「そんな、なんとかしてやったらいいじゃねえか。

クレオソートのくせに、のほほんと見物しているテはあ
るめえ」

「無いのだ、痔の薬は。ここには」

「けっ！ けっ！」

例の独特の舌打を続けざまにしたが、ふと、木村へ向
き直ると、

「よっしゃー」と、胸を張る語調で云った。

「もう少し待ちな、工面してやっからな。——紙だよ、
紙」

次の監守長室の清掃当番のとき、西山は、いつになく
精勵した。ことに監守長の長靴は入念にして、ピカピカ
に磨き上げた。比島で米軍将校から巻き上げたという、
かねて御自慢の長靴であった。

「ほう。よく光ったな」

「コツがあるんでさ。睡です」

「ツバ！ 睡で磨いたのか」

監守長は、初耳だったらしい。

「ヘッヘッヘッ……。そこがコツなんです」

西山は、鼻をうごめかせてから、本題に入った。

「監守長殿。ときに、独房にブチこまれている、あのイ
ギリスの将校は、銃殺だそうですが、トンコロリの日
は、いつですか？」

「シグレム少佐のことか。もう間もないが、それがどう
かしたか？」

「い、いえ、べつに……。ただ、お訊きしたまでのこと
で」

と、西山は、言葉を濁した。

（そうか。間もないとなると、こいつは、早えとこてを
うたなくちゃなンねえぞー）

——イラワジ・デルタ地帯へ、夜間、飛行機で落下傘潜
入して、現地人諜者群を指揮していた英軍情報将校のシ
グレム少佐が、戦時スパイとして銃殺刑の宣告を受け、

独居房に収監されてきたのは、今から十日ほど前である。

西山は、シグレム少佐を一ト眼見るなり、「トウモロコシのおっさん」というニックネームをつけたが、これは言い得て妙であった。

いかにも果敢なげな淡茶色の顎ひげをひょろりと垂れ、半ズボンから、いやに細長い毛脛をにゅうつと出して、瘦せつぽの身体を風にも乗せているみたいな、ふわふわとした歩き方は、たしかに「トウモロコシのおっさん」というよりほかないのである。

毎朝。きまつて彼は第五雑居房の鉄柵の前を来往した。いつも、片手に汚物桶を提げ、片手に本を開いて読みながら、ふわふわと風に乗って、汚物捨場へ行き、再び、風に乗って独居房へと帰って行くのであった。

その日、出役作業から帰ってきた木村をつかまえて、西山が、ひょんなことを訊いた。

「お早う、というのは、英語でなんていうんだ？」

木村は、呆気に取られながら答えた。

「ハイ。——グッド・モーニングと云います」

「グッドモーニングか。よしきた。次に、本のことはないんだ？」

「本？ 本ですか。ブックです」

「ブック。よしきた。それじゃ、おれに呉れろは、どういんだ？」

「ギブ・ミイと申します」

「なあんだ。わりかし簡単じゃねえか。一丁、おれがやってみるから、聞いててくれ」

翌る朝であった。

例のふわふわとした歩き方で、「トウモロコシのおっさん」がやって来るのを見ると、西山は鉄柵にすり寄った。

「ようーグッド・モーニング」

と、彼はいった。

シグレム少佐は、本から顔を上げた。声のした鉄柵へ淡緑色の瞳を向け、日本兵の囚人と視線を合わすと、

「グッド・モーニングー」

と、応じた。西山は、臆面もなかった。

「そのブックをよ、おれにギブミイして呉ンないか。ええ、おっさん」

少佐が、なにか言った。西山には、途方もない早口に聞えた。

「木村。おっさん、なんて云ってるんだ？」

「ハイ。——君は、この本を読みたいというのか、と……」

「読みてえともよ。そいつはおれの大好きな本だと云いな」

木村は、そのままを通訳した。

少佐の表情が変化したのである。褪めた顔色に、ほつと紅みがさし、淡緑色の瞳が生き生きしてき、感動のようなものが面上に拡がった。

少佐は、再びなにか早口で云った。そして、また、本に眼を戻すと、ふわふわと去っていった。その後ろ姿へ、西山は、「けッー」と例の舌打をした。それから忌忌しそうに、

「客のトウモロコシ野郎め、行っちまいがった。——こ

うなりや、仕方がねえ。銃殺を待つとするか。その日によ。独房の清掃を買って出て、せしめてやっからな」

「いい、いいえ。六年兵殿ー」と、木村が、あわてて云った。

「シグレム少佐は、三日待ってくれ、必ず差上げると云ったんです。それから、こう言いました。神を信ずる者は、神の慈悲に……」

西山は、みなまで聞かず、

「なんだとー 呉れるといったのかい。そいつを早く云え、そいつを……。あと、じゃあ、三日だな。——おい、木村よ。辛棒しな。三日目にや、葉っぱで拭かなくても済むぜ」

木村は、ぎょっとした顔になり、思わず、声を高め、「六年兵殿ー」

きつとなって云ったが、

「おんや。なんだ、その面はー」

と、西山に向き直られると、あとの言葉が出なくなっ

てしまった。

監守が二名、また、現地応召していったのは、その翌

日であつた。軍医中尉は、遂に、英印軍がイラワジ河を強行渡河したという重大情報を耳にした。若し、それが事実とするならば、ビルマの日本軍の事態は真に危殆に瀕する。

彼は、その夜、消燈後、いつものように木村を毛布の中に呼び入れて、早速、この重大ニュースを教えてやつた。

「はあ。そうですか」

と、だけで、木村にびんとこないのが、軍医は齒痒かつた。といっても、軍医には、英印軍のイラワジ渡河が、どのようにビルマの全戦局に作用するかという説明は、専門外で詳述しようもないのである。ただ、大変なことになるぞということを、繰り返すよりはかなかつた。

その次の日が、シグレム少佐の云つた三日目だつた。

その朝。いつものように、片手に汚物桶を提げ、片手に本をひらいて読みながら、ふわふわとやってきた少佐は、鉄柵の前で足を停めると、おもむろに本を閉じ、その表紙に軽く接吻してから、鉄柵の隙間へ差入れた。

「謝々々！」

西山は、拾い上げて、ニッコリ笑つた。その笑顔へ、一ト言、少佐はなにか云い、そのまま、背を見せて、ふわふわと汚物捨場へ去って行つた。

西山は、ばらばらと頁をひと撫でした。

「ほつ。多々々あるぜ。それに、わりとやわらかな紙じゃねえか」

少佐が戻つてきた。そのまま、通りすぎるのへ、また、西山は「謝々々」と云つてから、頁を一ト撫みし、ビリビリつと捲りとつた。

「そらよ。二人で分けた」

だが、木村も、軍医も、手を出そうとしなかつた。西山は、じろりと二人の顔を見てから、声を尖らせていった。

「どうしたんだ。二人で分けたといつてゐるんだ」

「六年兵殿?」

慄えを帯びた声であつた。木村の顔は、泣きべそを掻く一歩手前の表情になっている。

「こ、これで、尻を拭くつもりですか。い、いけませ